
温もり ルーフェイア・シリーズ05

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

温もり ルーフェイア・シリーズ05

【Zコード】

Z3221E

【作者名】

「」

【あらすじ】

手が届かない、そう思っていた世界が、いまここにある。 ゆうやく馴染んで「ふつうの」学院生活が出来るようになつたルーフェイアの、ある冬の日です。 このシリーズには珍しい、ほのぼのストーリーです。今までに比べると短いです。 反王道、「無情といいう名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターなシリーズです。 元7桁Hitサイト掲載の改訂、シリーズの第5作です。

携帯版は1行毎の改行です

Ruffer

「シーモア！」

かけた声に、彼女が顔を上げる。

「遅いよ……って、なんだよそのカッコ」

「？」

あたしは首をかしげた。

別にいつもと同じで、どこか変わっていないはずだけど……。
だけビシーモアの瞳には、そつ映らなかつたみたいだ。

「わうちゃうとなんか、可愛げのある格好してくると思つたのに
さ。それじゃまるで、男子じゃないか」

「あたし一度も、男子に間違えられたこと、ないけど……？」

「そーゆー話じやないつて」
シーモアが呆れた顔をした。

「少し期待してたんだけどな。損した」

損したつて……なんだろう?

「まったく、シヒラノ・一の呼び声も高い美少女が、なんだつて
そんなカッコ……」

「いつも、じうだけビ……？」

ショートパンツにジャケットにロングブーツ。あと最近はさすが
に寒くなってきたから、中に薄手のハイネックのセーター。
ほんとだつたら冬の戦闘用を着てたいとこ 軽いし、動きやす
いし、あつたかいし だけど、そもそもいかなくて、たいていこん
なふうだ。

でも他にも、似たような格好をしてる女子は多い。

「もういい、分かった。あんたに期待したあたしが、バカだつたよ
？」

「やつぱりよくわからない。

けどシーモアのほうはなんだか、自己解決したようだ。

「さ、行こうか？」

「うん」

行くところのは、ケンディクの街のことだ。ナティエスたちに誘われて、これからひとまわりすることになってる。
ただちょっと時間の都合がつかなくて、あたしとシーモアはあとから一人で行って、合流することになった。

「ほら早く、船が出まつよ？」

「あー」

慌てて、出る寸前の連絡船に飛び乗る。すぐに縄が解かれて、船がすぐるように動き出した。

学院のある島は冬だといつも緑色で、その向こうに広がる海との対比が、とてもきれいだ。温暖なことで知られる、ケンディクならではの光景なんだろう。

そういうえば前にこの連絡船に乗ったのは、真夏だった。シエラへ入学する時に乗って以来、まだ一度目だ。

そして気がついた。

もう半年も、過ぎたんだ。

なんだかとても、不思議な気がする。

たったそれだけしか経つていらないのに、あたしの生活は激変した。戦場にいたことが夢だったようにも思える。

身内と離れたのも初めてだ。もっとも他のシユマーラ家の子供は、たいてい生まれた直後から親と別に暮らしてゐるから、あたしはかなり甘いのだけだ。

ただ確かに生活は平穀になつたけど、その分カンが鈍つてしまつて、けつきょく毎日訓練施設に入り浸つて、太刀を振りまわしながら、だそだなそれで、訓練島まで出るハメになつっていた。

まあこの方が、思いつきりやれていいんだけど……。

どつちにしても上級生になつて、また戦場へ出るまであと最低四年、よほど氣合を入れておかないとボケてしまいそうだ。

「なに見てんの？」

「え？」

シーモアに訊かれて、はつと我に返る。考え事に熱中してて、かなりぼうとしてたみたいだ。

戦場だつたら死んでるな。

自分に呆れてしまう。たつた半年でこの調子だから、先が思いやられた。

「なんか面白いもんでも、あつたかい？」

「何見てたか、よくわかんない……」

「聞くんじゃなかつた」

シーモアが処置ナシ、つて顔で肩をすくめる。

「まつたくあんた、変わつてて面白じよ」

「どういづ……意味？」

「そのまんまや」

そのまままつてつまり、あたしが普通と違うから面白いってこいつ」となんだらうけど……。でもあたしつてそんなに、変わつてるんだろうか？

たしかに戦場育ちの分、そのへんは極端だらうけど。

そんなことを思つてゐるうちに窓の外は、本土がだんだん大きくなつてきて、砂浜が見えてきた。

「いー、きれい……」

「ああ。夏なんかこの海、泳ぐのにサイコウだよ」

「こんなところで？」

世間つて、案外ヒマなのかもしれない。

でもそういうえば、あたしは終わつてから中途入学したからやつてないのだけど、年間のカリキュラムの中に水泳が入つていて。思つてた以上に、シエラはのんびりしてゐらしい。

M e Sがこんなふうで、いいんだろうか？

まさかシエラへ来る前は、M e Sがこんなのんきな感じだなんて、思わなかつた。命のやりとりをしないで済むぶん戦場よりマシ、なくらいだと想像してたから。

でも、来てよかつたと思つ。

こんなふうに友だちと街へ出るなんて、一生縁がないと思つてた。だいいち友だちが出来るとおえ、あたしは思つてなかつた。きつと死ぬまで、あの戦場でだけ過ごすとばかり……。急に涙があふれてくる。

「ほら、ルーフェニア着くよ……つて『メン』、あたしなんか言っちゃつたかな？」

「ううん、違う、違うの。

あたしこんなふうに、友達と出歩けるようになるなんて、思つてなかつた……」

涙を拭きながら、慌てて説明する。

聞いたシーモアが、ちょっと複雑な表情をした。

「ばーか。行くよ」

それだけ言って歩き出した彼女の背を、あたしは慌てて追いかけた。

「質問への回答

システムの都合上、直接返信できませんでしたので、こちらで。ルーフェニアの太刀について、第1作ではタシュア先輩からもらつた、第2～4作では兄の形見となつていて、との指摘メッセージを頂きました。

はい、そのとおりです。については第1作で出てきた太刀と、第2～第4作で出てきている太刀は、別物のためです。

この件については少し先の話で、なぜ変わったのか出でますので、申しわけありませんがお待ちください。
「質問、ありがとうございました。」

Episode : 03

Seamor Side

ケンディクまでの連絡船の中、隣の美少女をシーモアは、なんとなく眺めていた。

不思議、としか言こよつのない少女だ。

こうしていると華奢で儂げで、とても獨りで生きていけるように見えない。だがひとたびバトルとなれば、並ぶものはない戦女神と化すのだ。

(ほんと、アンバランスつてやつだね)

まさにその一言に尽きた。

しかも性格にいたつては纖細としかいこよつがなく、すぐ泣き出してしまう。

ただこれは周りの話では、シーラへ来る前が何かいろいろたいへんだったとかで、その反動もあるらしげが。

(けど、このカワイイで泣くつてのは、やっぱ反則だなあ)
たとえ彼女に非があったとしても、少しひが悪者にされてしまふ
そうだ。

船が揺れる。

もうそろそろ、ケンディクの街に着く頃だった。

「ルーフェイア、着くよ」

言つて、気がつく。

少女は泣いていた。

(まさか、せつを言つたことで…)

思わず心配になる。ふつうならいいところの葉ではなくても、こ

の少女は傷ついてしまったことがあるのだ。

もう少し、自信を持つていいと思つただが……。

「『メン、あたしなんか言ひやがつたかな？』

「ううん、違う、違うの。

あたしこんなふうに、友達と出歩けるようになるなんて、思つてなかつた……」

シーモアの問いかに、ルーフェイアはそう答へる。

聞きようによつては、以前イジメたことを責めてこいつな言ひ方だ。だがこの少女には、そういういたイヤミなどこりはない。本氣で嬉しくて泣いている、と思つて間違いないだらつ。

(……言つてくれるねえ)

とても同じ年とは思えないほど華奢な少女にこいつ罵られる、とても意地悪など出来なくなつてしまつ。

何より、あれだけの騒ぎをすべて水に流してくれてこゐるのだ。これ以上こいつから何かするのせ、シーモアにしてみればプライドが許さない。

「ばーか。行くよ」

照れ隠しにわざとわざ言つて、シーモアは荷物を肩にかけた。

「あ、『めん』

涙を拭いて、ルーフェイアもついて來た。

Ruffer

潮風が優しく吹きぬけた。

後ろに控える海のせいなんだろうか？ ケンディクの街は、なんとなく青のイメージがある。それに街全体も、観光都市のせいか手入れが行き届いていて、とてもきれいだ。

「どこで……待ちあわせ？」

「駅前の広場だよ」

あたしの問いに、シーモアはそう答えた。
白い石畳の道を歩いていく。

メインストリートをずっと行って、大きな交差点で右に折れる。もうそのまま先が、駅前の広場だ。

あたしたちは広場をざつと見まわして、すぐナティエスとミルを見つけた。しかもなぜか、イマドとその友だちまでいる。

「悪い、待らせたね」

「ううん、時間ぴったりだよ」

「待つてないよん」

シーモアの言葉に、ナティエスとミルがはしゃぐ。

それからこの2人、今度はのあたしの方に向き直つて、また騒ぎ出した。

「あー、ダメじゃん。ルーフュッてば、やっぱりそんなカツコしてる～！」

「ほおんど、なんでそんな、男の子みたいにしてんの？！」
なんか、シーモアとおんなじことを言つ。

「あたしも言つたんだよ。でもルーフハイア、ちつとも分かつてないでさ」

「もお！ とにかく常識ないんだから」「なんだか、ひどい言われようだ。

「そしたらさ、先にうつむいて歩いてるだから~」

ミルが勝手に決める。

「やうだね。そうしようか？」

「イマド、うつむいて歩いていい？」

「ああ」

ナティエスの言葉に、イマドたちも笑いながら立ち上がる。ビーツも状況を飲み込んでいないの、あたしだけみたいだ。

でもなんか、やな予感がするんだけど。

「んじゃ決まり~！ も、うつむいて」

ミルが強引に、あたしの手を引いて歩き出しだ。

「何……？」

「いいからいいから」

わけも分からぬまま、引きずられていく。

「うつむくだよ~ん」

彼女が得意げに立ち止まつたのは、一軒のブティックの前だつた。そして勢いよくドアを開けて、店に入つていぐ。

「お父さん、じめえん！ ちょっと予定変わつてね、早くなつちやつたんだ~」

はじけるような声で、店の奥に声をかけた。

「父ちゃん？」

「あ、ルーフェイアは知らないか。ソレでも、ミルんちなんだよ」

「つそ……」

実家がブティックやってて、娘がMersって……？

息子ならまだ分かる。徴兵逃れで、男の子をMersに入れる親は少なくない。

けどミルはむちゅん女子だし、実家はブティック経営なんて、どう見回してもMersへの理由が見当たらなかつた。

「あはは、やつぱルーフェイアもびっくりしてね」

あたしの様子に、ナティエスが笑い出す。

「だつて、なんか……ぜんぜん関係ない……？」

「ミル、お母さんが軍にいたんだ」

そんな理由でいいんだろうか？

事実は小説より とは言つたが、ソレまでくると予想をはるかに超えてる。

「ま、ご多分に漏れず、それなりの事情はあるんだけじゃ」

「……そう、なんだ」

そう言われて少し納得する。

もつとも抱えている事情つて点じゃ、あたしが学院内で一、二を争つてしまつただろうけど。

と、勢いよくミルが戻ってきた。

「用意できてるって」

「そりやよかつた。じゃ、行こつか？」

なぜかシーモアが、がつちつとあたしの右手をつかむ。

「そだね」
ナティエスが左手。

「な、なに……？！」

けど、みんな笑うだけだ。

「は～い、いつてらっしゃあい……」

そのあたしの背中を、勢いよくミルが押した。

せんせん予想してなくて、思わずよろける。そこをすかさず、シモアとナティエスに引きずられた。

「ちょ、ちょっと！」

「ダメ！ ちゃんとこいつち来て！」

なんか勢いにおされて抵抗できなくて、そのまま隣室まで連れて行かれる。

「え、あ、やだ！ ちょっと、何……？！」 やだ、やめて……

「だめ」

「やだ、やだつてば！」

「静かにしなさいって」

まさか、友だち相手に本気を出すわけにもいかなくて、されるがままだ。

「どうだい、出来たかな？ わや、いいじゃないか」
結局ミルのお父さんが覗きに来たときには、しっかり着替えてせられていた。

「ねえ、こんな格好、やだ……」

「どして？ カワイイよ」

「だつて……」

ひたすら動きづらい。

だいいちスカートの類なんて、何かあつたときの正装以外、着たことがない。

「ほら、いいからこっち来なよ
またもや引きずつて行かれる。」

次に連れて行かれたのは、ミルの家の食堂だつた。なんだかいろいろ、テーブルの上に並べられている。

でもこれ、どうみても何かのお祝い……？

「ねえ、これ……何？」

あたしが聞くと、みんなが爆笑した。

「やだもう。忘れちゃってるの？」

「でもさあ、らしくていいんじやないか？」

まったくわけが分からぬ。

「ねえ……だから何なの？」

「しようがないなあ。イマド、説明したげなよ？」

水を向けられて、初めてイマドが口を開く。

「お前、今日誕生日だろ」

「え……あ！」

忘れてた。

でも、あたしだつて忘れてたのに、どうしてみんな知ってるんだろ？

「お前のねえだよ、俺らに教えたのは
よほどあたしが不思議やつにしていたらじへり、イマドが説明す
る。

母さんてばー！

あたしの母さんはかなり変わってる上に、ともかくなこかと、過
剰なく、うごき世話を焼きたがる人だ。
けど……今回は許せるかな?
また涙が出てくる。

「あ～あ、やっぱフルーフュニア、泣いちゃった～」
「まじめい、泣くことないでしょ。そ、座つて座つて」
自分で泣いてちゃダメだとは思つただけど、どうしても涙が止
まらない。

「そ、泣いてないで食べようへー。」

「うん」

あたしやつと涙を拭いて、席についた。

Natties

シーモアがイマドから相談された時から、みんなでこいつそり計画してたんだけど、思つたとおりルーフェイアつたら喜んだの。ついでに泣いちゃつたけど。

あと場所を提供してくれたミルのお父さん、すつじぐルーフェイアのこと気に入っちゃって そりゃ彼女超カワイイもんね なんだかいろいろ、おまけでプレゼントしてたみたい。で、普通だつたらミルが焼きもち妬くとこなんだけど、これがまた彼女そーゆーものをどつかに忘れてきちゃつた性格だから、いつしょになつて騒いでるじ。

ともかくみんなでおいしい料理食べてお祝いして、あたしたち外へ出できて。

「ねえ、これからどうする？ もつかいどつか行こつか？」

あたしが聞くと、みんなが考え込んじゃつた。

「そうだね、とりあえず公園でも行つてみるかい？ 今日は風もないし、きっとといんじやないかな？ 港も見えてきれいだしさ」

シーモアが提案する。

「公園？ そんなのがあるの？」

「ルーフェイア、公園つべつに珍しくないから

何かにつけて、このズレつぶりだもの。でも少年兵あがりだつていうし、ケンディクなんかもほとんどここへ来たことないっていうから、しょうがないかな？

他にこれといつていい案もなかつたから、みんなでそこへ行こう

つてことになつた。

「きれい……」

坂のとちゅうで、ルーフェイアつたら感動して立ち止まつて。ここへ、公園への坂を下りてくと、いきなり海が開ける。ケンティクでもいちばんきれいな場所じゃないかな。

穏やかな潮風に吹かれながら、みんなでぞろぞろ。

でもこいつしてみるとルーフェイア、ほんとにカワイイ。ミルのお父さんが選んでくれた 写真渡して頼んだのは白のブラウスに、淡い翠色のボレロとスカートのツーピース、すっごく似合つてゐるし。

「——ゆー可愛いのが似合つて、美少女の特権かな？

港は今日も何隻もの船が入港してて、人が行き交つてた。

「あ、ほらほらあ。またくるよお？」

ミルつたらもう、五歳児みたいな声。

けどつられてそつちをみると、確かに一隻が入港するとこ。しかも大きさはそんなじやないけど、すつこい豪華な船なの。

「ああいうの、一度乗つてみたいかも。ね、ルーフェイア？」

「……乗つても、たいしたことないの」

「え？ 乗つたことあるの？」

彼女の分かりきつたよつた答えに、あたし思わず聞き返しかやつた。

でもルーフェイア、答えてくれない。しかもなんだか厳しい顔。なんて言つのかな？ どうしてこれがここに、つていう感じの表情だった。

Ruffer

どうしてこの船が、ここに？

それがあたしが、いちばん最初に思ったことだつた。

一見豪華なだけの、普通の船。でも、あたしには分かる。これは間違いなく、シユマーラ家のやつだ。

こんな連絡、まったく受けてなかつた。だいいちこんなに田立つマネをして、いったいなんのつもりなんだろ？

そのうち船から、人が降りてきた。うち、何人かは見覚えがある。出来れば気づかないことを祈つていただけれど、ムリだつたみたいだ。そのうちの一人がしつかりとあたしの姿を認めて、こちらへ歩いてくる。

あたしよつと年上の青年。髪も瞳も同じ色。

「ねえあれ、兄弟？」

「ううん……」

じつさいは、従兄弟だ。けどここで、そう言つわけにもいかない。でもそれを知つてからはずか、彼はまっすぐこちらへ来ると口を開く。

「グレイス、ちょうどよかつた。頼まれていた物を持つてきたところだ」

「その呼び方はやめて。それに届け物なら、学院宛に送ればすむでしょう？」なんでわざわざ、こんなことをするの？

つい声がとげとげしくなつてしまつるのは、自分でもどうしようもなかつた。

けど彼、あたしのこうことなんか聞いていない。

「ケンティクに一家族駐在をやることになつたんだ。なにかあれば、そこへ連絡を取ってくれればいい。学院の通信網は、まったく信用出来ないからな。

それと届け物一式は、これからけやんと学院へ持つていくわ。君に持たせたりはしないよ」

友達が一緒にいることなんて、まったく気にしない。あたしが必ず死に事情を隠してゐるのに、それをわざと表に出さうとしてるみたいだ。

案の定、最初からある程度事情を知つてゐるイマドはともかく、シーモアもナティエスもミルも訝しげな顔をしている。しかもまだ、話は終わらなかつた。

「それから、一度ファクトリーへ帰つてくれないか？ 夏の精密検査をしていないうつ？」

「長期休暇でもなかつたら、帰れるわけないでしょ？ それにこんな話、ここでしないで」

「どこまでぶちまける気なんだろ？」

「別に構わないだろ？ どうせ誰に分かるわけじゃない。」

「すぐに帰れないなら、とりあえず採血だけさせてもうえないか？」

？」

拳銃に言ひながら、専用の入れ物を取り出している。

彼は学者だ。主に医学系を修めていて、あたしや母さんといったシユマーの中でも血が濃い総領家の、主治医も勤めてゐる。だから一応、あたしの身体を心配してはいるんだろうナビ……。

「いいかげんにして。採血だつたら後でして、凍らせて送るから。
それにあたし、採血しにここへ来たわけじゃないの」
早々に会話を打ち切つて引き上げようとする。
けど。

「よく見るとなんだ、その格好は？　ずいぶんな安物を着ているな」

「ファールゾンっ！」

さすがのあたしも、思わず怒鳴りつけた。

彼に悪気がないのは分かつていて。研究ばかりで世間の常識をまったく知らないだけだ。

でも、言つていいくことと悪いことがある。

ただ当のファールゾンは、なにを怒鳴られたかさえ分かつていな
い。

「だつてそうだろう？　グレイスともあらうものが、そんなそのあたりで売つていそうなものなど。

「こつちへ戻ればひとつも不自由はしなくてすむのに、君の考えて
いることがわからなによ」

「……ファールゾン＝ゼニア？」

あたしの声が、刃を含む。

「ん？　なんだ、怖い顔をして？」

次の瞬間、あたしは動いていた。強烈な左の回し蹴りを食らって、
あたしより大柄な彼が吹っ飛ぶ。
イマドが口笛を吹いた。

それを後ろに聞きながら、お腹をかかえて転がつたままの彼に、あたしは歩み寄る。

「早く帰つてもらえる?」

「これ以上、みんなに嫌な思いをさせたくない。」

「帰つてくれないなら、あたしも考える」

「うぐ……いやだから、君にはそれは、ふさわしくないと……」

あたしはもう一步進み出た。

「何も分かつてないのに、何が言いたいの?」

それよりこれ以上みんなに嫌な思いさせるなら、容赦できないわ。

今ここであたしが何をしても、どこからも文句は出ないのよ?」

この洞竭に、ファールゾンの顔から血の気が引いた。

実際、いまあたしが口にしたことを実行しても、本当に文句は出ない。そのことは彼も知っている。

「分かつたなら、少しば慎んで。

「だれか、ファールゾンを連れていつてくれる?」

少し離れたところで成り行きを見ていた家の者に声をかけると、彼らは慌てて走り寄つてきて彼を連れていった。

それを見届けて、みんなの方へ振り返る。

「あの、ごめんね。うちのが、なんかヘンなこと……
許してもらえるとは思えないけど、ともかく謝つた。

「ルーチャーん気にしちゃダメだよ。ルーチャーんが言つたわけじゃないんから」

「てか、ルーフェイアって、怒るとこ今までキャラ変わるのか」

「んー、こいつの場合どうちかつてと、内弁慶じやねえかな」

「なんだソレ」

「ともかく悪いのアイツだし…でもさ、ルーフェって結構やるねえ？」

みんなが口々に言つ。

ただひとりナティエスは、見るべきところを見てた。

「ねえ……ルーフェイアの家つていつたい、どうこうのなの？」

いちばん尋かれたくないことを尋いてくる。

どう答えようか困つてると、意外にもシーモアが助け船を出してくれた。

「やめな、ナティエス。学院にいる連中なんて、みんなワケありさんただつてそうだろ？」

「だから、聞くんじゃないよ」

「 そうだね、わかった」

ナティエスも、あっさりと下がる。こんなにありがたいことはなかつた。

「シーモア、ナティエス……」

「気にしなさんなつて」

これでいい、そんな笑顔でシーモアが笑つた。
また泣きそうになる。

「ああ、ルーフハイア、ほら泣こいやダメだつてば」「おまえ、何回泣くんだよ……。しゃあねえ、もつかこどりか食いに行くか？」

「あ、賛成！」

「あたしも～」

「ぼくはルーチヤんが行くといふになら、そりやびへでもイマドの言葉に、みんなが賛成する。

「うつむきの時間だしね。ビリトあるへ」

「せしたら……あたし、払つから」

「え、ホントっ！」

れつめのことがあるから、みんなの顔がぱっと輝いた。

「よし、んじや高いの食べるわ～！」

「だよね。あの船とか今のこととか、ルーフハイアつじぱせつたい、お金持ちなのはキマリだもんね」

「あ……」

しまつた、と思つ。

そしてまた、何か嫌な予感。

「えつと、あの、あたしも、そんなに持つ合せ……」

「だ～めー、ああこう家なら、どうせ信用決済の記録石持つてんでしょ

しょ

「それにあの調子なら、イザとなれば、誰か来てくれそうだしね」「いつんじやなかつたと少し後悔しながら、あたしはみんなといつしょに、繁華街へと足を向けた。

Imad

「やつぱ廻間とは、雰囲氣違つた」

「うん」

茜に染まつた夕暮れン中、俺とルーフェイア、また港へ降りてきただところだ。ちなみにシーモア他の連中は、氣を利かせてちやつちやと学院へ戻つてゐる。

けどなあ。

氣を利かせたのが悪いつてこたねえけど、ルーフェイアの場合はンなものどうかへ落としちまつてゐるわけで。

「す、じ、い、海が金色ー。」

なんせこの調子だ。

もつとも年より見かけが幼いから、これもけつこう似合つちゃいる。しかもいつもと違つて可愛らしきカッコしてゐるから、眞うじとナシだつた。

「こんな色……初めて」

たしかにこいつの言つとおり、今日の海はきれいだつた。夕焼けに染まつた海が、陽の光に煌めいて、文字通り金粉でも撒いたみたいだ。

「撮影機でも、持つてくりやよかつたな」

「ううん、いい」

「『』すと色が消えるつていうのが、こいつの言い分だつた。

「それに戦場じや、そんなの『』すヒヤー、なかつたし……」

「そうだよな」

「こいつの心から、やるせないモビの悲しさが伝わってくる。

優しくて泣き虫で、なのこいつが育つたのは、地獄とも言える戦場だ。

その辺のじとま、俺は「こいつのお袋からある程度聞かされてた。しかもついでに、保護者を頼み込まれてる。

ただ……毎間の騒ぎを見る限り、実際はもつひとつ複雑らしかった。少なくともでかいバックを持つてるのは、間違いない。

少しだけ迷つて、俺は口を開いた。

「昼間のナティースじゃねえけど……お前って、ホントはなんなんだ？」

ルーフェイアのやつがつづむべ。

「別に言いたくなきゃ、かまわねえんだけどよ」

「シユマーなの」

「はい？」

思わず妙な返事を返す。

つづーか、今とんでもないこと聞いた気が……。

「まあかとは思うけどよ、シユマーって　あのシユマーか？」「イマドがどのシユマーを言つてるのか、わかんないけど……。でも多分、そうだと思つ」

「マジかよ」

ほかに言いようがなかつた。

シユマーってのは、軍事関係者の間じや裏で有名つてやつだ。つても実態はなんだかほどんど分かつてなくて、代々傭兵をしてて、ガキを戦場で少年兵として育てちまうつて話だけが知られたた。けどまさか、この華奢なこいつが、その「シユマー」って……。しかも昼間の様子じや、同じシユマーでもルーフェイアのヤツ、

やうとう上の姫の身分（？）だわい。

ただどうか、俺は納得もしてた。

「どうりでお前、上級傭兵並みなワケだよな。つかシユマーナ、
そういうじゃないとダメなんだわい」「じ

こいつのバトルはたまに皿にすりけり、はつきり言って上級の先
輩たちをへタすりや上回る。

だけど俺の一言に、こいつをたら、メチャクチャ悲しげな表情
になつた。

「それ……違うの

「違うっ！」

泣き虫のこいつが泣かないのが、コトの重さを表してた。

Ruffer

話して……いいんだらつか?

あたしは悩んでいた。

自分がシユマー家だと誰のせ、どのみちイマドは誰となればならないと思っていた。

だからそれは、別にいい。

だいいち今でも、イマドはあたしの特異体質に併せた薬を持ってくれていて、何かあったときは対応してくれるということになっている。でも……その先は別だ。

聞けば、いやでもあたしもつわる一連の流れに、巻き込まれるだろう。

そんなことに、イマドを巻き込んでしまっていいんだらつか?

グレイスは死神。

そう、昔ファーレゾンが言っていたのを思い出す。でもそんなあたしに、イマドが意外な言葉をかけた。

「『グレイス』は、ンなに珍しいのか?」

「知ってる……の?」

「お前の普段のラストネームが、ホントは『デルネーム』だって」と
はな

じつやう母さんから聞いたから。

またお節介して!

ほんとうに母さんと来たら、油断も隙もない。

あたしの本名は、ふだん学院などで使っているのは、少し違う。

グレイスは実際には、ラストネームではなくミドルネームだ。

ルーフェイア＝グレイス＝シユマー。それが本当の名前だった。

シユマー家と言つるのは、軍関係者の間ではわりあい有名だ。かなり長い間続いている傭兵の家系で、子弟を戦場で育てることで知られている。

ただ家人間は実際にはシユマー姓を名乗らないから、ちまたじや噂だけで誰も実態はしらない、という状況になっていた。

それにしてもいつたいどこまで聞いてくるのか、不安になる。

「けどそしたら……何を、知つてるの？」

「だから、お前の名前だけだって。

けどグレイスつてのがメチャクチャエライのは、さつき分かった

「そつか……」

「こんなに察しがいいなんて。

けど、次に思い出す。イマドに隠し事は、できたためしがない。

「で、グレイスつてなんなんだよ？」

「氣軽な調子で彼が訊いてきた。

どう説明するか迷う。

だいたい、ちょっと説明して分かるようなものでもないし……。

違う。

それ以前にあたし、どうして「こんなにすりすり話してるんだろ？」

「イマドは……関係ないのに。」

知つてほしいのと、言つてはいけないとの間で、あたしは黙ってしまった。

「ま、やつかも言つたけど、言いたくなきゃそれでいいしな。
けどよ……他に誰も知らないっての、けつこううらうせ」
はつと顔を上げる。
イメージと視線が合つた。
寂しいのか哀しいのか分からぬ、イメージの不思議な表情に、な
ぜか涙がこぼれた。

「いい、の……？」

「いって」

「その瞬間　あたしの中で何かが、ふと軽くなる。

ずっと辛かつた。

父さんや母さんと一緒にいたこと違つて、誰もあたしの本当の姿を知らないで、でもそれを知られないよつて隠して……。こぼれる涙が止まらない。

「あたし……ショマー家の、次期総領なの……」

「なるほど」

なんだかあつさりとイマドが納得した。

「これだけで、分かるの……？」

「いや、わからんねえけど。でもよ、よーするにそゆ立場なんだろ?」

いい加減と言えばいい加減だけど、イマドなりに理解はしているらしい。

あたしはひとつ息を吸つて、話出した。

「うちの家、ふつうは『次期総領』はないの。

けどあたしは……グレイスの名前を持つてるから、特別で……」

うちの家でこれを名乗るのは、あたし一人だ。逆に言えばそれだけ、この「グレイス」という名前には重さがあるといつことになる。もともとの由来は、家の始祖メイア＝グレイスから來ていた。遠い昔、まだ人が神と争っていたころ　彼女は神を封じたのだという。

「あれ、それって言い伝えと違わねえか？」

「うん、少し違う」

一般に伝えられている伝説では、神は封じられたんじゃなくて、「逃げた」ってことになっている。

「魔法の力を手に入れた人間は、軍を組織して天へ攻め込んで……」「けど、居なかつたんだよな」

「うん」

世界を創りなおすという神に、人は逆らつた。門をくぐり天へ攻め込み、それを見た神は、地上を予定より早く焼き払った。

同時に神は天界に怪物を大量に放ち、人間を襲わせた。一瞬にして人々はパニックに陥り、散り散りになつて地上へと逃げ戻つたといふ。

それでも戦い慣れただく少数は、天の城へ攻め入り玉座までたどり着いたが、そこに神の姿はなかつた。

「だから、逃げたんじゃないか、って話だろ」「イマドの言うとおりだ。

そのあと、人は天界から魔獣に追われて逃げ戻り、焼かれてさらり貧しくなつた大地のせいでの、互いに争うようになつた。

そして消えた神は、いまもどこかに潜んでいるのかも知れない。そう伝説は締めくくつている。

「ただ、うちじや、そこが違うの」

「えーっとつまり、シユマーじやそのメイアとやらが、封じたつてなつてるワケか？」

考えながら言う彼に、うなづく。

そして、続けた。

「そのとき、始祖メイアは亡くなつて……その子供たちが、シユマ一家を作つたの。

「いつか帰りし神を、倒すためには」

「なんか、やたら壮大な話だな。

けど、ずっと昔のことだろ？ ビラだつていいんじゃねえのか？」

イマドの言葉に首を振る。

「ううん、違うの。昔のことじゃ、ないの……」

シユマ一家にとってこの話は、「昔のこと」じゃない。

「“神”は封じられただけ。だから今も……復活のチャンスを狙つてる。

そしてシユマ一家には、稀に産まれる。始祖メイアと同じうつと、それ以上の力を持つた、子供が

「それがお前ってワケか」

何も言えなくなつてしまつたあたしを見て、イマドがひとつ、ため息をつく。

「じゃあ……学院なんか連れてきちまつて、悪かつたな。屋間のヤツも言ってたけどお前、自分ちだったら大事にされそудだし。

帰つたほうが、いいんじゃないのか？」

「それはイヤ」

自分でも驚くくらい間髪いれずに、答えてしまつた。

「なんでだ？」

不思議そうな顔で、イマドが聞く。

「だって、特別扱い……されるから」

いきなり彼がお腹を抱えて笑い出した。

「はは、あはは、ははっ、お、お前らじこや」

「そんなに……笑わなくたって……」

「なんだか妙に悔しい。」

「いや、悪い悪い。でもよ、普通は特別扱いされたくて、みんないろいろやるんだぜ？」

それをお前ときたら、あつさつヤダつて言い切るから

「イマドはまだ笑い転げてる。」

「みんなはそうでも、あたしはいや……」

つい、いろいろなことを思い出して悲しくなる。

あたしは……普通がよかつた。

普通の女の子みたいにとまでは言わない。でもせめて、他のシユマーの子供たちと同じくらいでいたかった。
けどそれは、到底ムリな話で……。

三歳の時に「グレイス」の名を継ぐ 始祖とあたしを含めても
七人しかいない と分かつてから、ずっとあたしは特別扱いだつた。

次期総領の座を得、絶大な権力を得て……もしあたしが死ねと言えば、うちの人間はためらわずに自殺するだろう。

総勢で数百人にのぼるシユマー家。

そしてそこから分かれて、後方支援的なことや様々な研究をする
ようになつた、ロシュマー家の数万人。

それだけの人間の命運が、あたしみたいな小娘の手に握られてしまっている。

こんな、右も左も分からないような小娘に。

「あと四年で……あたし、総領になるの。でも、あたしには……ムリ……」

「こんなことを人に言つたのは、初めてだった。今まで周囲にはシユマーの人間しかいなくて、とても言えなかつた。」

あたしこひとつシユマーの人間たちの、あの敬愛のまなざしは重荷だつた。

彼らはあたしを疑わない。そういうふうに出来ていない。グレイスと総領には絶対服従、それがシユマーだ。
だから、間違うなんて許されない。

「そんなの、あたしに、出来るわけ……」
うつむいてため息をつくあたしに、イマドが言葉をかけた。
「ん~、お前ならできるんじゃないかな
「どうして?」
「すぐ泣くから
「え?」

これは 初めて言られた。当然意味などわからない。

あたしの驚いた様子に、イマドは「上手くいえない」と言しながら、言葉を続けた。

「なんつーのかなあ……お前マジ泣き虫だろ? ゼンゼンリーダーっぽくないって言つとか
気のせいか、ひどいことを言われてるような……。

「でもよ、だからいいと思うんだ。リーダー然としてるヤツって確かに頼り甲斐あるけど、どうか雲の上つて感じじゃん。」

だけどお前だと、誰かになんかあつただけで泣いちゃまつてや。そりゃそーゆーの、リーダー向きじやないかもしんねえけど、ついて側にはありがたいぜ?」

「もう、なの……?」「

あたしはいつも周囲から、泣くのを止めとばかり言われていた。

「全員が全員そつとは言わねえけどさ。

でもお前みたいなのがトップだと、『あ、心配してくれてるんだな』って気になるんだよな。自分たちのこと、ただの駒みたいに考えてねえなって。

だから、できると想ひつけ

毎度のこととで我ながら情けないナビ、また涙が出てへる。

「ほらな、これだけで泣こちまつし。

まあ、お前自身はそつとうしらうじだらうかじや、周りは好きでついてきてる、つてパターンになるんじやねえのか?
だから、やってみろよ

最大級の、励まし。

イマドにやう言われると、できそつな気がする。

「ありがと……」

泣きながらだけど、笑つてみる。

そんなあたしを見て、彼も笑つた。

「やうやく、その顔な。

あ、やうだ。すっかり忘れてたぜ

何かを思い出したよつて、イマドがポケットをあべぐつた。

「ほら、これやるよ

「え？」

あたしの皿の前に、小さな包みが差し出される。

「これ……？」

「いや、こちおつかの 俺からな」

「くれるの？」

あたしがそつまつと、困ったように彼が頭を搔いた。

「だ〜か〜ら、俺からだつて…」

「えつと、何が……？」

「だから、誕生日のプレゼントだつづーのー。」

「あ……！」

やつと意味を飲み込む。

「えつと、その、もらつていいんだよね……？」

「お前がもらわなかつたら、誰がもらつんだ」

「あ、そつか

イマドがため息をついた。

「つたく、どじまでボケてんだ

「い、ごめん……」

自分がなきくなつて、なんだか泣きたくなる。
でもその前に、イマドが包みをあたしに持たせた。

「開けられつか？」

「う、うん

リボンをほどいて、包み紙を破らないようひそかにほがしていく。
中から箱が出てきて、それもそつと開けた。

「あ……」

自分の顔がほころぶのが分かる。

出てきたのは、可愛いキー・ホルダーだった。

「じめんな、ンなちつちやいモン。」

まさかお前が、あそこまで大金持ちのお嬢さんだとか、思ってなくてよ。」

「ううん、いい。これで、いい……」

どうしてだらう？ 悲しくないのに、涙が出てくる。

「大事に、するから……」

「ンなたいそうなモンじゃねえって。

それよりそろそろ、戻るか？ いい加減暗くなっちゃったし」「言われてあたりを見回すと、確かにもう日が落ちて、空に星がまたたいていた。

吐く息も少し白い。

「 そうだね」

優しい潮騒の音を聞きながら、学院への連絡船に乗った。ほかに乗客はない。

船の後舷へ出てみると、街の明かりが遠ざかって、暗い海の上にゆらめいた。

振り仰ぐと、煌く星が目に飛び込む。
海にまたたく灯と、空にまたたく星。

この光景を忘れない、そう思った。

あとがき

最後まで読んでください、ありがとうございます。明日より第6作「表と裏」の連載となります。今までどおり、毎日“夜8時過ぎ”の更新です。

明日は恐れ入りますが、こちらか筆者サイトのリンク、または検索サイト内よりお願いします。

感想・批評、メッセ等大歓迎です。お気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3221e/>

温もり ルーフェイア・シリーズ05

2011年2月6日17時55分発行